

色彩象徴の難易と変動について

高下, 保幸

<https://doi.org/10.15017/2328654>

出版情報：哲學年報. 36, pp.45-58, 1977-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



色彩象徴の難易と変動について

高 下 保 幸

人間が動物に優越する存在とされる理由として「シンボルを使用すること」は、ほとんど異論のないところであろう。「シンボルとは何か」についての議論は、多くの先哲の労に依るところが大きいですが、本研究はそのシンボル論を述べるのを目的とするものではない。ここでは単純に、シンボルとはAなるものをBなるものによって置き換える、特に多なるものを一なるものによって（ある場合には一なるものを多なるものによって）置き換える認識作用であるとの考えに立ち、心理学的に興味深いテーマ、「何故にシンボルを使用するのか」「いかにシンボルを使用するのか」「シンボルの発達起源」という問題への接近を試みるものである。

人間はいろいろなシンボル様式を用いるのであるが、ここでは人間精神のより根源に抛ると思われるシンボル、すなわちある事物、事象を色でもって喩えるいわゆる「色彩象徴」を取りあげる。色彩象徴とは、人間の感情や本能に深く関わるころの神話、祭、夢といった原始的シンボルと言っても然るべき人間生活においても、また人間が動物に卓越する特徴である言語という最も効率のよいシンボルの中で「黄色い声」「緑のそよ風」といった言いまわし、表現法としても随所にみられるものである。本研究の目的は、この色彩象徴の概要を明らかにすることである。

問 題 点

色彩象徴に関する研究は、言語によらぬシンボル、すなわち音声シンボル（音楽や語音のシンボル性）、図形シンボルなどの非言語的シンボルの研究という大きな枠組みの中で行なわれている。色彩象徴独自の研究は小保内・松岡

(1956), 松岡 (1972) が行なっているが, その目的とするところは被験者の色彩象徴反応の他者もしくは基準との偏差によって, その被験者のパーソナリティを推定しようとするものである。本研究は同様の方法, 手続きをとるが, 色彩象徴の個人差をみようとするものではなく, 色彩象徴の普遍性を明らかにしようとするものである (ただし被験者が大学生のみである点を考慮すれば, その結果を敷衍することを大学生集団に限定すべきであろう)。

色彩象徴に関する重要なテーマのひとつは, 色彩象徴が人間に生得的に規定されたものであるのか, 社会的要因の影響が大なるものであるかの問題である。その結論は恐らくいずれでもあると言えよう。すなわち人間に基本的な色彩象徴もあれば, 社会的, 文化的要因に規定される色彩象徴もみられる。例えば日本で「高貴さ」の象徴である紫は, ローマ・カトリック圏では「苦悩」を表示する。そうした個々の色彩象徴には, いろんな歴史的, 文化的背景が関わっているのであるが, 本研究の目的とするのは文化・社会のちがいを越えた普遍的な色彩象徴を見出すことである。その目的のためには, 交差文化的な比較研究や児童を被験者とする発達研究の必要があろうが, 本研究は間接的に色彩象徴の普遍性を探究しようとするものである。

実験では, 色彩によって象徴される対象として「単語刺激」を用いる。研究の第1の目的は, 恐らく基本的な色彩象徴と社会・文化性の強い色彩象徴の区別は困難であろうが, いろんな単語刺激に対する色彩象徴のマニュアルとも言うべき一覧表を作製することである。更にはいかなる単語が色彩象徴しやすいか, 個人差を超越して色彩象徴の共通性, 一致がみられるかを明らかにする。松岡 (1972) は41の刺激語に対して16の色彩の中からその象徴となるものを選ばせているが, その刺激語については系統的な選択を行っていない。本研究では次の予測の下に刺激語を選択した。

Osgood et al. (1957), 大山・田中・芳賀 (1963) のSD法を用いた色彩の評定によると, 色彩は「活動性」の意味次元と大いに関連する。すなわち色は活動, 動きを象徴するのに有効と言える。また Wexner (1954) を始めとする多くの研究によると, 色彩は感情や気分を表現する言葉と強く結びつく。以上を

合わせて考慮すると、色彩は動きのある激しい感情状態、いわゆる情緒と言われるものの記述に適切であろう。またものの形容を記述する言葉（形容詞）については、遠感覚（視・聴）よりも、感情的側面と大いに関連すると思われる近感覚（嗅・味・触）に基づく形容詞との結びつきの方が強いと考えられる。また名詞については、事物を抽象する言葉、すなわち抽象語は、色彩象徴と同じく抽象作用に関連するということから色彩象徴が容易で一致度が高いと推測される。

以上の点から感情語や活動を記述する語（動詞）の色彩象徴は容易であり、被験者間の変動が少ないと予測される。同じ感情語の中では情緒語の色彩象徴が、また認知的活動を記述する動詞よりも動作、特に身体的動作を表わす動詞の色彩象徴が容易で一致度が高いであろう。形容詞の場合は、遠感覚よりも近感覚の形容詞に対する色彩象徴が容易で一致度が高いであろう。名詞に対する色彩象徴は比較群として反応を求めるものであるが、名詞の中では抽象作用という色彩象徴の本来的機能からして、抽象語や視覚的に形の明確でないものを記述する語の色彩象徴の方が、形は明らかであるがそれ特有の色が決っていないものを表わす名詞の色彩象徴よりも、容易で一般性が大きいであろう。

方 法

使用した刺激語

上に述べたように、色彩象徴の難易、固定性を比較することを目的として、次の区分にしたがって色彩象徴を行う刺激語を選択した。その選択の基準は著者の恣意によるものであるが、大方の常識の線に沿ったものと思われる。

刺激語は、大きくⅠ．感情語群、Ⅱ．感覚語群、Ⅲ．動詞群、Ⅳ．名詞群の4群に分類した。先ず「感情語」群は、明らかな表情を伴う感情状態を表わす A. 情緒語群（『驚き』『興奮』など7語）、発達後期より生じ、激しい表情を伴わない感情の記述語である B. 感情語群（『嫉妬』『軽蔑』など12語）、更に知的な判断を大いに含むと思われる感情状態を示す語である C. 高等感情語群（『あこがれ』『ユーモア』などの9語）の下位3群より構成される。「感覚語」群は、「嗅・味・触」覚に関連する D. 近感覚語群（『甘い』『痛い』など14語）

と、「視・聴」覚に関連する E. 遠感覚語群（『遠い』『大きい』など13語）からなる。「動詞」群は、身体的活動、動作を表わす F. 動作語群（『進む』『力む』など12語）と、頭脳や知力を使うこと、すなわち認知的活動を示す G. 認知語群（『読む』『想像する』など13語）の2群を下位群とする。最後に「名詞」群は、具体物を表示しないいわゆる H. 抽象語群（『運命』『価値』など13語）、具体物であるが視覚として明確な形をもたないものを記述する I. 無形象物群（『香り』『風』など13語）、そのものの特定の色が決っていないものを記述する J. 多色物群（『菓子』『映画』など13語）の3群に分かれる。（以上10群、合計119語については表5を参照されたい。表5には、刺激語群別に配列してあるが、実際の呈示順序は、ランダムである。）更に、練習用の刺激語として『母』『酔う』の2語を加えた。

使用した刺激色

象徴化させる色彩の選択にあたっては次の事項を考慮した。多くの色彩を用いるには手続きや方法の上で限度がある。多数なるものを少なるもので置き換えるという象徴作用の本質からすれば、使用する色彩の数は多くある必要はない。色彩の物理的な次元に沿って使用する色彩を選択するよりも、われわれにとって「馴染みのある色」「見馴れた色」を用いる方が、特殊物の一般化という象徴作用の意義からすればより適切と思われる。以上の点から無彩色3（白、灰、黒）、基本色5（赤、黄、緑、青、紫）、その他2（茶、ピンク）の合計10色を象徴化する色彩として選んだ。

色彩刺激としては日本色彩研究所の標準色紙を用いた。100×180 cm の灰色のケント紙（およそ修正マンセル表示でN8.5）に、15×15 cm の大きさの色紙を(1)黒(N1)が12時の位置にあって順次右まわりに(2)緑(5G/5/10)、(3)赤(5R/5/14)、(4)茶(5YR/4/4)、(5)ピンク(4R/7.5/7)、(6)紫(5.5P/3/10)、(7)白(N9)、(8)黄(5Y/8/14)、(9)灰(N6)、(10)青(10B/4/10)と円環状に貼ったものを色彩表とした（各色紙の側には上の順序の番号が書かれている）。

被験者

4年制私立大学文科系（法律、経済、経営、文学、児童教育）の1～4学年

(19歳～23歳)の学生 231名 (男子: 125名, 女子: 106名)。なお色盲, 色弱者は, 回答用紙のフェイス・シートの当該欄のその旨の記述に基づいて分析対象から除いた。

手続き

心理学の入門コースの授業の教室で集団実験として行った。前述の色彩表を教室正面の黒板に掲示し, タテ60×ヨコ20 cmの白紙にゴシック体の黒字でタテ書きされた刺激語を実験者が読み上げながら呈示し, 被験者にその刺激に対して色彩象徴することを求めた。各被験者は, 刺激語呈示5秒後の実験者の『ハイ』の合図で, 選択した色の番号を手許に配布した用紙の記入欄に書き込む。どうしてもその刺激語に色をあてはめることができない場合には『×』を, また色彩表にない色をあてはめたい場合は『他』の文字を記入する。更にそのときの色彩象徴化, すなわち色のあてはめが容易であったか, 困難であったかについて, 回答用紙上に設けられた「1. 非常にむずかしい」から「5. 非常にやさしい」に至る5点尺度上に評定を行う。10秒間の記入時間の後, 次の刺激語が呈示される。以上の要領で2刺激語(『母』『酔う])について練習した後, 途中5分間の休憩をはさんで119刺激語について色彩象徴反応を行う。

色彩象徴の方法の教示は, 大体は松岡(1972)に準じたものであるが, 本実験の教示を以下に詳しく挙げる。

(教示)

「ここに掲示している色彩表を, 特定の色に注目するのではなく, 全体をゆったりとした気持でながめておいてください。

次にわたたくしが, いろんなコトバをひとつずつカードでみせながら読みあげます。そのコトバが表わすものの感じに最も一致する色を10個の色の中からひとつ選んでください。そのコトバから受ける感じを色で表わそうとするものです。

例えば『母』というコトバを呈示したとき, それが意味するところの感じを持つ色, 例えば3番の色を選ぶという具合です。その場合『母』→『母の日』→『カーネーション』→〔赤あるいは白〕と連想的に色を選ぶのではなく、『母』というものの全体の意味, 感じ, 印象を色でもって表わそうということ

です。

理屈っぽく考えるのではなく、コトバのもつ意味、感じに合うと思う色を直観的に選んで下さい。正しい回答というものはありませんから、自分の思う通りに答えて下さい。同じ色を何度選んでも結構です。(後略)」

結 果

データ整理法

各刺激語について、各色彩をその刺激語の象徴として選択した被験者の人数、色彩象徴化できないとした被験者の人数(『×』反応の人数)を計数し、更に前者について特定あるいは少数の色への選択の偏よりを表示するために、集中度係数 $C = \sqrt{x^2 / \{N(k-1)\}}$ [k : カテゴリー数=11, N : 全体から『×』反応の被験者数を除いた被験者数] を算出した。また色彩象徴の難易についての全被験者の評定の中央値を算出し、これをその刺激語の色彩象徴の難易の指標とした。これらはすべて表5に列挙してある。

色彩象徴の難易

色彩象徴の難易の指標としての『象徴化できない(×)』反応を示した被験者の人数と、被験者による難易度の評定の中央値の2つは、当然に相関がみられた(ピアソンの $r=0.86$)。

最初に刺激語群間の『×』反応の多少の比較を行った(表1)。Ⅰ.感情語群, Ⅱ.感覚語群, Ⅲ.動詞群, Ⅳ.名詞群の4群全体について中央値テストによる比較をすると有意な差がみられたので($x^2=24.56$, $df=3$, $P<.001$)、個々の群間について中央値テストによって分析した結果、Ⅱ-Ⅳ群間を除いていずれの群間も『×』反応の度数の差は有意であった(表2)。すなわちⅠ-(Ⅱ, Ⅳ)-Ⅲ群間で『×』反応の度数は有意な差を示した。Ⅰ.感情語群は、他のいずれの群よりも『×』反応は有意に少なく、Ⅲ.動詞群は他のいずれの群よりも『×』反応は有意に多い。

またⅠ, Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ群別に、その群内の下位群間(A-B-C, D-E, F-G, H-I-J)の『×』反応の多少を中央値テストによって比較したところ、いずれも有意な

表 1. 刺激語群ごとの『×』反応数の平均と標準偏差

	I. 感情語群		II. 感覚語群		III. 動詞群		IV. 名詞群		
N	28		27		25		39		
M	14.1		23.4		51.4		28.2		
SD	10.6		18.7		23.0		19.0		

	A. 情緒語	B. 感情語	C. 高等感情語	D. 近感覚語	E. 遠感覚語	F. 動作語	G. 認知語	H. 抽象語	I. 無形象物	J. 多色物
N	7	12	9	14	13	12	13	13	13	13
M	13.7	13.9	14.7	16.8	30.5	56.9	46.2	24.5	27.7	32.5
SD	10.6	12.0	6.9	11.3	20.9	20.0	22.6	17.9	15.2	21.0

表 2. 刺激語群間の『×』反応数の比較

比較する語群	中央値テスト
I < II	$\chi^2=5.27, df=1, P<.05$
II < III	$\chi^2=15.02, df=1, P<.01$
IV < III	$\chi^2=12.87, df=1, P<.01$
I < IV	$\chi^2=8.23, df=1, P<.01$
I < III	$\chi^2=23.27, df=1, P<.01$
II < IV	$\chi^2=1.57, df=1, N.S.$

差はみられなかった。

次に刺激語群間の色彩象徴の難易度評定値の比較を行った(表3)。個々の群間で評定値の平均の差は、I-IV ($t=2.33, df=65, P<.05$), I-III ($t=7.47, df=51, P<.001$), II-III ($t=4.97, df=65, P<.001$), IV-III ($t=4.56, df=62, P<.001$) の群間で有意であった。す

なわち動詞群は、他の語群に比べて色彩象徴が有意に難しいと評定された。

また I, II, III, IV 群別に、その群内の下位群間 (A-B-C, D-E, F-G, H-I-J) の評定値の平均の差についてみると、D. 近感覚語群よりも E. 遠感覚語

表 3. 刺激語群ごとの色彩象徴の難易度評定値の平均と標準偏差

	I. 感情語群		II. 感覚語群		III. 動詞群		IV. 名詞群		
N	28		29		25		39		
M	2.85		2.94		3.42		3.03		
SD	0.24		0.37		0.30		0.35		

	A. 情緒語	B. 感情語	C. 高等感情語	D. 近感覚語	E. 遠感覚語	F. 動作語	G. 認知語	H. 抽象語	I. 無形象物	J. 多色物
N	7	12	9	14	13	12	13	13	13	13
M	2.84	2.82	2.91	2.78	3.12	3.52	3.34	3.00	3.02	3.06
SD	0.2	0.3	0.2	0.4	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.3

群の方が色彩象徴が有意に難しいと評定されたのを除いては、いずれも有意ではなかった。

色彩象徴の集中度

象徴化する色彩が特定の、もしくは少数の色に偏る程度を表わすものとして集中度係数 C を算出したが、その C の刺激語群ごとの平均を示すのが表 4 である。I, II, III, IV 群の個々の群間で C の平均を比較すると、I—III 群間 ($F=3.12, P<.02$ なのでウエルチの法によって, $t=3.53, df=43, P<.01$), II—III 群間 ($F=4.58, P<.02$ なのでウエルチの法によって, $t=3.42, df=36, P<.01$), II—IV 群間 ($F=2.63, P<.02$ なので, ウエルチの法によって $t=3.01, df=40, P<.01$), I—IV 群間 ($t=3.17, df=95, P<.01$) で有意な差がみられた。すなわち I. 感情語群, II. 感覚語群は, III. 動詞群, IV. 名詞群に比べて、色彩象徴として有意に特定の色もしくは少数の色が選択された。言い換えれば I, II, 語群は, III, IV 語群に比べて被験者間で、象徴化される色彩により大きな一致がみられた。

表 4. 刺激語群ごとの集中度係数 C の平均と標準偏差

	I. 感情語群		II. 感覚語群		III. 動詞群		IV. 名詞群			
N	28		27		25		39			
M	.379		.392		.287		.299			
SD	.116		.141		.066		.087			
	A. 情緒語	B. 感情語	C. 高等感情語	D. 近感覚語	E. 遠感覚語	F. 動作語	G. 認知語	H. 抽象語	I. 無形象物	J. 多色物
N	7	12	9	14	13	12	13	13	13	13
M	.466	.378	.313	.467	.311	.312	.264	.288	.320	.289
SD	.131	.080	.100	.135	.095	.070	.051	.099	.081	.076

また下位語群間の比較では、A. 情緒語群は C. 高等感情語群よりも ($t=2.46, df=14, p<.05$), D. 近感覚語群は E. 遠感覚語群よりも ($t=3.33, df=25, p<.01$) 有意に大きな色彩象徴の集中を示した。F. 動作語群は、G. 認知語群よりも大きな色彩象徴の集中を示す傾向がみられた ($t=1.88, df=23, .10>p>.05$)。

考 察

予想と大きく違ったのは、「活動」の記述詞であるⅢ・動詞群、特に F. 動作語群と、Ⅳ・名詞群の中で H. 抽象語群の色彩象徴が困難とされ、かつ色彩象徴の選択の一致が小であったことである。その他については、大体予想に沿った結果であった。

F. 動作語群の色彩象徴性の欠如については、色彩と強く結びつくことされる意味次元上の「活動性」の因子を、「動作語」が必ずしも内包していないことに帰因するのではないかと思われる。「活動性」の意味次元とは、単に「動くこと」「活動すること」ではないのであろう。

また H. 抽象語群の低い色彩象徴性は、SD 意味次元での説明をするならば、抽象語は恐らく「評価性」因子の強く関与するものであり、色彩がその「評価性」の意味側面の表示に適切でないことの結果であると言えよう。H. 抽象語群の中で『平和』『真実』について色彩象徴の一致度が高く、象徴化が容易であると評定されたのは、この2語が社会的ステレオ・タイプの色彩象徴性をもっていることの反映であるかもしれない。

実験結果の全般から結論とするならば、感情語、特に情緒語と、近感覚に関連する形容詞とは、その色彩象徴が容易であり、固定した象徴色彩が選ばれる、すなわち色彩象徴性が高いと言える。近感覚と感情との密接な結びつきを考慮すれば(例えば『痛み』とは感覚であるのか、感情状態であるのか判然としないことなど)、一言にして感情や気分、並びにそれに関連することがらは色彩象徴性が高い。逆に言えば、色彩は感情や気分の象徴に有効である。そしてこの領域の色彩象徴が、恐らく普遍的な色彩象徴と言うべきものであろう。

その他に注目すべきいくつかの点を列挙する。I. 感情語群の色との結びつきは、陽性方向の赤、陰性方向の黒、灰が典型的であるが、『ユーモア』『笑い』については黄(ならびにピンク)との連合がみられ、それも非常に高い集中度を示している。それに反して『泣く』は特定の象徴色彩はみられなかった。この点については更に研究の余地が残されている。

「熱」と赤, 「冷」と青という温度感覚と色彩との強い結びつきについてはこれまで多くの実験的研究によって言われているが(木村, 1950など), 本研究でもそれは確認された(『熱い』—赤: $C=.78$, 『冷たい』—青: $C=.48$). また『重い』—黒 ($C=.59$), 『軽い』—白 ($C=.48$), 『やわらかい』—ピンク ($C=.72$), 『かたい』—黒 ($C=.48$) の色彩象徴に高い一致がみられたが, これらの関係については今後実験的に検討してみる必要がある。

類似した刺激語(『笑う』と『ユーモア』, 『鑑賞する』と『見る』, 『読む』『学ぶ』と『知る』など)の色彩象徴をみると, やはり非常に類似した色彩の選択度数分布を呈している。このことと合わせて, 度数分布が偏っているか散らばっているか, すなわち色彩象徴性が大きい小さいかは, その言葉がもつ意味が単純であり特定の意味の側面が際立っていることを表わす, あるいは複雑な意味構造をなしていることを表わすとすれば, この色彩象徴はSD法と同じように, 言葉や概念のもつ意味を表示したり測定したりする方法として発展する可能性を持つと言える。

ま と め

1. 感情語, 形容詞, 動詞, 名詞, 119の刺激語に対する231名の被験者(大学生)の色彩象徴反応を, 刺激語ごとに色彩別の選択度数分布, 象徴化できないとする人数, 集中度係数, 色彩象徴の難易の評定の中央値を表にしている。
2. 感情語, ならびに近感覚に関連する形容詞は, 色彩象徴化が容易であり, 被験者間で象徴化する色彩の一致度が高い。
3. 動詞, ならびに名詞(抽象語も含めて)は, 色彩象徴性が低い。
4. 『ユーモア』『笑う』—黄, 『熱い』—赤, 『冷たい』—青, 『重い』—黒, 『軽い』—白, 『やわらかい』—ピンク, 『かたい』—黒, などは色彩象徴の高い集中度を示した。
5. 色彩象徴は, 言葉や概念の意味の表示や測定に有効な方法となる可能性がある。

表 5 各刺激語について各色彩を象徴として選択した被験者の人数,
『×』反応の人数, 集中度係数 C, 難易度評定の中央値 Mdn

刺 激 語	白	ビンク	赤	黄	緑	青	紫	茶	灰	黒	他	× 反応	C	Mdn
I. 感情語群														
A. 情緒語群														
驚 き	3	0	96	40	4	7	10	3	4	17	13	34	.46	3.16
興 奮	2	4	147	43	4	7	10	1	2	1	0	8	.66	2.16
怒 り	0	1	130	2	0	9	9	13	5	42	10	10	.56	2.88
笑 う	13	45	36	111	10	0	0	1	0	1	4	10	.48	2.65
泣 く	13	22	32	18	5	41	16	5	34	3	17	25	.20	3.15
恐 怖	1	0	20	1	2	19	22	6	29	115	9	7	.48	2.74
喜 び	5	40	54	98	19	3	0	0	0	1	9	2	.42	2.66
B. 感情語群														
嫉 妬	1	3	96	18	5	6	37	4	21	26	8	6	.41	2.87
不 安	6	1	4	6	5	14	28	9	97	47	6	8	.43	2.56
軽 蔑	4	2	9	16	3	10	44	25	42	33	6	37	.27	3.31
淋 し さ	14	4	0	0	7	59	20	16	80	8	14	9	.36	2.47
感 動	9	16	89	28	20	22	5	2	0	2	12	26	.39	2.87
落 胆	2	0	3	1	1	9	22	17	94	71	3	8	.47	2.71
苦 悩	1	1	8	3	1	7	27	36	77	67	1	2	.40	2.79
愛 情	17	84	58	13	19	7	4	4	1	3	5	6	.39	2.41
倦 怠	2	9	9	4	6	10	36	34	81	22	8	10	.35	3.01
憎 し み	0	3	61	3	4	6	36	22	16	53	7	20	.33	2.97
同 情	9	48	7	11	15	32	20	17	21	6	10	35	.21	3.26
憂 う つ	1	4	1	1	1	23	36	13	125	21	5	0	.52	2.56
C. 高等感情語群														
あ が れ	29	64	20	40	32	22	4	0	0	0	13	7	.25	2.60
ユ ー モア	15	48	15	116	13	1	1	1	4	2	7	8	.52	2.56
尊 敬	30	17	6	9	23	39	31	13	6	13	18	26	.18	3.09
良 心	66	45	13	17	35	15	3	7	4	3	6	17	.32	2.93
自 信	13	7	49	21	38	22	13	11	7	15	11	24	.21	3.17
後 悔	2	2	12	1	1	13	36	34	81	35	7	7	.37	3.08
責 任	2	0	8	3	15	65	15	32	23	41	8	19	.30	3.03
退 屈	13	16	2	4	4	10	15	48	93	9	7	10	.41	3.00
友 情	24	43	10	29	54	22	2	4	7	3	9	14	.26	2.65
II. 感覚語群														
D. 近感覚語群														
甘 い	6	92	20	53	4	1	3	6	0	0	28	18	.44	2.52

刺 激 語	白	ビン グ	赤	黄	緑	青	紫	茶	灰	黒	他	× 反応	C	Mdn
痛 い	2	2	82	23	0	19	14	12	14	14	14	35	.37	3.25
に が い	3	0	3	4	5	11	22	69	53	26	9	26	.35	3.04
軽 い	114	31	0	51	10	5	1	0	5	0	10	4	.48	2.47
強 い	3	0	56	5	5	16	2	24	4	72	12	32	.38	3.18
か た い	0	1	0	1	3	17	4	46	35	108	3	13	.48	2.95
熱 い	2	2	182	25	2	2	1	1	1	1	7	5	.78	2.07
弱 い	38	73	1	19	9	6	3	3	40	3	17	19	.36	3.01
やわらかい	12	174	1	18	9	2	3	2	0	0	8	2	.72	2.24
重 い	0	1	0	3	0	4	14	40	19	143	2	5	.59	2.54
なめらか	32	90	1	20	32	9	2	1	2	1	21	20	.42	2.83
粗 い	0	1	15	8	1	12	5	68	56	19	13	33	.37	3.19
冷 た い	42	1	2	2	3	112	14	2	34	9	7	3	.48	2.52
すっぱい	5	12	10	73	19	27	25	2	5	0	33	20	.32	3.04
E. 遠感覚語群														
遠 い	30	0	1	0	10	54	10	7	49	40	10	20	.24	3.13
大 き い	23	6	31	17	8	32	1	8	7	30	14	54	.21	3.42
高 い	33	0	5	9	18	106	5	2	9	4	9	31	.50	3.09
深 い	3	0	0	0	6	105	22	11	4	71	8	1	.47	2.59
さわがしい	0	0	72	59	9	3	11	18	15	7	14	23	.34	3.10
狭 い	5	2	5	3	4	10	30	36	34	60	11	31	.31	3.23
静 か な	33	7	0	1	61	74	14	9	19	5	8	0	.34	2.54
平 ら な	52	16	1	6	28	14	2	20	40	4	12	36	.28	3.25
小 さ い	30	30	9	16	11	9	9	9	20	11	16	61	.16	3.61
浅 い	55	35	3	30	18	15	0	7	21	0	28	19	.23	3.09
広 い	65	9	1	20	59	53	0	2	5	3	6	8	.37	2.78
近 い	5	21	19	41	31	4	5	7	5	4	22	67	.25	3.43
低 い	5	9	0	3	11	18	6	53	59	24	9	45	.34	3.30
III. 動 詞 群														
F. 動作語群														
進 む	18	0	12	14	49	53	0	0	5	5	13	62	.33	3.54
力 む	2	0	62	10	3	7	12	29	6	36	11	53	.34	3.74
ぶつかる	3	2	78	23	1	5	9	13	14	37	11	35	.38	3.31
走 る	25	5	16	22	47	34	1	5	10	1	10	55	.27	3.44
跳 ぶ	28	10	9	32	36	60	3	3	1	1	9	39	.33	3.23
切 る	12	1	76	13	9	44	7	3	10	7	8	41	.40	3.33
投 げ る	15	2	10	15	20	52	3	14	5	10	14	71	.28	3.74
す べ る	33	5	6	19	10	30	1	15	34	6	22	50	.22	3.48

刺 激 語	白	ピ ン ク	赤	黄	緑	青	紫	茶	灰	黒	他	× 反 応	C	Mdn
歩 く	10	3	2	11	80	18	4	25	17	3	15	43	.39	3.25
す わ る	2	15	0	4	27	8	4	49	16	3	8	95	.35	3.93
打 つ	10	1	60	31	9	24	2	15	12	17	8	42	.30	3.26
つ か む	2	12	14	11	11	9	12	26	8	10	19	97	.15	3.93
G. 認 知 語 群														
読 む	20	1	1	3	44	34	12	18	18	9	4	67	.28	3.68
想像する	59	20	0	18	25	32	12	3	22	2	16	22	.25	2.78
計算する	18	3	5	5	9	41	8	19	32	23	4	64	.25	3.43
知 る	27	9	7	18	36	36	9	10	6	7	10	56	.22	3.44
考 え る	3	0	2	3	26	55	22	29	39	12	7	33	.28	3.22
聞 く	12	20	3	21	35	20	7	8	17	5	11	72	.20	3.86
ま ね る	4	22	11	26	11	2	10	15	17	3	14	96	.20	3.88
鑑賞する	15	7	6	12	56	36	26	10	16	3	5	39	.28	3.25
推理する	23	1	1	7	19	72	15	10	47	12	5	19	.34	3.08
疑 う	2	2	12	9	4	16	48	14	74	31	1	18	.36	3.05
見 る	15	8	18	39	57	33	3	1	1	2	9	45	.33	3.38
想 い 出 す	25	26	6	15	43	38	9	7	17	4	12	29	.22	3.11
学 ぶ	16	5	10	11	42	38	10	25	16	10	7	41	.22	3.23
N. 名 詞 群														
H. 抽 象 語 群														
運 命	19	1	32	6	7	15	21	1	24	76	11	18	.33	3.07
価 値	24	4	10	13	12	12	17	20	11	17	17	74	.12	3.85
富	8	14	32	43	21	9	34	10	7	11	9	33	.21	3.34
真 実	112	3	18	8	26	29	7	0	2	12	5	9	.47	2.56
平 和	95	25	2	22	50	16	0	1	3	1	14	2	.41	2.25
成 功	14	9	46	54	24	22	7	2	0	0	22	31	.27	3.09
魂	60	1	42	7	4	20	13	7	15	24	15	23	.28	3.12
永 遠	84	7	2	1	26	55	13	2	13	11	7	10	.39	2.65
美	53	27	41	21	28	12	10	2	1	0	15	21	.25	2.84
人 生	46	8	10	11	20	43	8	7	24	19	10	25	.22	3.08
本 能	23	14	46	13	13	15	19	9	13	14	10	42	.18	3.48
道 徳	45	9	1	4	32	29	20	23	25	17	4	22	.22	3.11
幸 福	36	82	10	47	29	7	2	1	2	1	6	8	.39	2.59
I. 無 形 象 物 群														
香 り	24	50	4	36	45	4	4	2	1	0	27	34	.31	2.95
風	54	6	0	4	66	65	2	1	10	2	18	3	.38	2.44
電 気	7	1	58	88	3	11	5	5	7	3	15	28	.46	2.94

刺 激 語	白	ビ ン ク	赤	黄	緑	青	紫	茶	灰	黒	他	× 反 応	C	Mdn
ば い 菌	2	3	10	5	4	5	18	43	43	78	8	12	.35	2.93
声	25	15	15	45	31	20	1	7	5	6	14	47	.23	3.30
う な り	4	3	19	12	2	31	18	33	27	37	10	35	.21	3.41
炭酸ガス	33	1	4	9	5	10	5	11	90	29	8	26	.41	3.11
騒 音	0	1	35	30	3	13	14	31	58	30	6	10	.26	2.95
放 射 能	17	2	30	32	4	16	20	4	47	30	10	19	.22	2.97
空 気	96	6	0	5	23	45	0	1	12	2	28	13	.42	2.57
こ だ ま	17	10	6	43	68	26	1	4	13	1	9	33	.35	3.06
細 胞	18	26	9	8	47	11	4	9	23	8	13	55	.23	3.39
磁 気	5	4	10	3	3	18	6	38	59	34	6	45	.33	3.29
J. 多色物群														
菓 子	13	58	21	65	7	0	2	9	1	3	20	32	.37	3.10
映 画	15	18	5	25	24	29	5	7	13	26	10	54	.17	3.13
カレンダー	34	9	15	27	39	22	2	3	6	4	17	53	.24	3.38
商 店	0	12	39	51	10	5	2	19	10	0	19	64	.30	3.63
切 手	21	4	5	12	51	20	5	11	12	2	19	69	.28	3.69
絵 葉	16	8	34	35	45	25	8	8	1	30	17	34	.23	3.11
き も の	52	9	6	13	16	10	13	31	39	10	8	24	.24	2.98
自 動 車	12	49	40	12	20	11	40	10	4	4	12	17	.25	2.83
鳥	14	0	16	12	20	41	3	13	42	20	17	33	.20	3.10
く だ も の	27	8	4	34	55	37	1	22	6	5	8	24	.28	2.89
昆 虫	3	28	35	100	39	1	2	0	0	0	11	12	.43	2.62
花	0	1	3	11	59	7	8	79	8	30	6	19	.40	2.91
	11	46	71	64	26	1	0	0	0	0	6	6	.36	2.44

引 用 文 献

- 木村俊夫 色のみかけの温さと重さについて 心理学研究, 1950, 20(2), 33-36.
- 松岡 武 色彩象徴テストの原理と方法 東京: 日本製版, 1972.
- 小保内虎夫・松岡 武 色彩象徴性格検査法 東京: 中山書店, 1956.
- 大山 正・田中靖政・芳賀 純 日米学生おける色彩感情と色彩象徴 心理学研究, 1963, 34(3), 109-121.
- Osgood, C.E., Suci, G.J. & Tannenbaum, P.H. The Measurement of Meaning. Urbana: Univ. Ill. Press, 1957.
- Wexner, L.B. The degree to which colors (hues) are associated with mood-tones. J. appl. Psycho., 1954, 38, 432-435.